



男女共同参画の今を知る情報誌

ねっとわあく

2020/12/25 Vol.75



さらに一歩、前へ

目次

- ②「やれることを、やれる人が、やれるときにやる」
- ⑤「減災お茶べりひろば」開催中!!
- ⑦女性目線の防災活動を地域へ
- ⑨地域の防災とファシリテーション
- ⑩寄稿 静岡県地震防災センターにおける男女共同参画の取組
- ⑫あざれあ図書室にあるおすすめの本を紹介します!
- ⑬もっと話そう これからの性教育
- ⑮日常生活に性教育を 家庭で「性」と向き合うには
- ⑰看護・助産を学ぶ学生の性教育～静岡県立大学の取組～
- ⑲子どもに何を伝える? 家庭での性教育
- ⑳静岡県男女共同参画ポータルサイト「あざれあナビ」の紹介
- ㉑「ねっとわあく」アーカイブ 1985年発行第6号より

さらに一歩、前へ

2020年、新型コロナウイルスの影響で、私たちの様々な活動は制限され、時には厳しい選択をせざるを得なかった。つながってきたものが分断され、社会の中にある差別や格差が浮きぼりになった。

在宅勤務でのジェンダー格差や育児の問題。介護や医療現場でのケアの問題。シングルマザーをはじめとして、仕事を制限されることによる収入の減少。ステイホームによるDVや虐待、性暴力の増加。風評やデマ、健康と経済を天秤にかけざるを得ない社会情勢など、深刻な事態が次々と表面化した。

重苦しい社会の空気は、私たちの気持ちを後退させ、一歩踏み出す力さえ奪ったと言える。

それでも、多くの人が、新しいつながりの方法を模索し、今だからできる活動を日々重ねている。

一歩踏み出したその足を、さらに一歩前へ。歩みを止めてはならない。時にその一歩の歩みが困難に思えるかもしれない。でも、あなたの後ろには、それに続こうとする多くの人がいる。

困難な時代に生きる私たちは、今こそ連携し、つながりを深める時だ。新たなアプローチを模索しながら。

今号では、地域で新たな雇用を生み出そうと奮闘する女性、DVを防止するための性教育からのアプローチ、地域で防災活動をする女性たちを取り上げた。さらにその先へ進もうと歩みを続ける姿から、今一度、男女共同参画について、一人ひとりが今できることを考えてみてほしい。

「やれることを、やれる人が、やれるときにやる」 女性の雇用を生み出す仕掛人～coco-Rin(ココリン)久米ゆきさん～

今までの仕事やキャリアを結婚や出産であきらめるのではなく、さらに広げ進化させながら家庭・育児と両立させている女性がいます。広島・浜松の2拠点で活動し、家族や友人、地域を巻き込みながら、互いにWIN-WINの関係を築く久米ゆきさん。久米さんは、農家民宿を経営しながら、周りの女性たちの雇用の場を生み出しています。子育てをしながらの自らの働き方、地域への思いなどを聞きました。



ママたちの 駆け込み寺を作りたい

久米ゆきさんは広島県呉市出身。芸術大学を卒業後、デザイナーとして関西で活動していました。大病をして広島に戻りました。病氣と向き合いながら、呉市でオーガニックカフェの経営とフリーデザイナーとして再始動します。

そして、結婚を機に浜松市北区三ヶ日町に移住。広島での店の経営とデザイナーとしての仕事は続けながらも、この地でも何かやりたいとずっと考えていました。

「その頃、妊娠・出産を経て、三ヶ日町在住のママ友が何人かできました。彼女たちからいろいろな話を聞くうちに、三ヶ日町には女性の精神的な逃げ場がないと感じたのです。家庭とは別の、母親たちがくつろげる場所、いい意味での駆け込み寺が必要だな、そういう場所を作りたいなと思いました」

同時期に、社会活動家が立ち上げた「寄



「ここにおりん」という地元の言葉から名付けた「coco-Rin (ココリン)」

り添いハウス“と”寄り添い士“の存在を知ったことも、駆け込み寺を作る大きなきっかけになったと、ゆきさんは話します。寄り添い士とは、お産を迎える家族の心に、その家族の一員になるくらいの信頼と安心感を持って寄り添っていく人のこと。「産前産後の母親が、鬱になり自殺に至るケースは世界中で日本が一番多いことを知りました。お産する家族の心をサポートする体制が日本にはまだないので、私と夫、友人の3人で登録し、今も勉強中です」

手作りの農家民宿を開業

母親たちのための「こういう場所があったらいいね」を実現するため、まずしなければいけないのが居場所となるハコづくりです。「自宅に隣接する夫の実家が空き家になっていたため、その家を改造して使うことにしました。古い家でそのままでは使用できないので、私ひとりでコツコツとリノベーションすることに。広島の祖父が木工だったため、小さい頃からものづくりの様子を見てきてDIYには自信がありました。しかし、結局1年かけて2部屋しか仕上がらなかったため、後半はママ友たちと一緒に作業しました。『こんな風にする」と素敵だね』などと話しながら、子どもたちと色を塗ったりして楽しかったですね」

作業をしながら、ゆきさんはこの家を農家民宿とカフェにしようと計画していました。「その頃、静岡県が農家民宿を推奨していることを知り、『そういうばうちはミカン農

家じゃん』と思い出したんです。そこで県のルールに従って申請することにしました。助成金はないけれど、経営のサポートをしてもらえるし、雑誌等でも扱ってもらえる。これはいいなと」。農家民宿事業は応募者が少なく、ゆきさんが県西部では2件目の申請者でした。「三ヶ日町では初めてだったので、行政も分からないことが多く、いろいろなところをぐるぐる回って、やっと許可が下りました。オープンまでの顛末は、思い出深いものになりましたね」



内装もすべて手作り。デザイナーゆきさんのセンスが光る

コロナ禍でのオープン

2020(令和2)年4月30日に農家民宿&カフェ「coco-Rin」がオープン。「ちょうどコロナ感染者が多数出ていた大変な時でした。随分悩みましたが、野菜生産者が苦しんでいるこの時期だからこそ、オープンしなければと思いました。多くの飲食店がストップしていたこの時期、生産者の野菜を広める、少しでも経済を回していくとい

う思いでオープンにこぎ着けました。広島でオーガニックカフェを経営しているので、人脈もスキルもあったのが助けになりましたね」

6月からは農家民宿も開始。「想像以上に反響が大きく、あっという間に8月は満室になりました。コロナの影響でその後半分はキャンセルになってしまいましたが、その分、家族の時間が持てたので良かったかなど。のんびり過ごそうと前向きに状況を捉えました」

民宿は一日一組一棟貸し切り。定休日等も設けていないので、お客さんが多いと仕事ばかりの毎日になってしまいます。「民宿は一日中フルに働くことになるので、子どもが寂しい思いをするかなと考えると…それをどうしようかというのが今の課題です」



地場を中心に、こだわりの食材をふんだんに使ったオーガニックランチ



天然酵母パンは店頭販売も

coco-rinを仕事の場に



専任の保育士がスタッフの子どもたちをみてくれる

coco-rinのスタッフの多くは、子連れで仕事にやっています。平日は保育士の資格を持つスタッフが、民宿の1室かゆきさんの自宅で子どもたちを見ています。

ゆきさんはcoco-rinを母親たちが楽しく集う場所としてだけではなく、仕事をしたい場所としてかかねてから思っていました。「三ヶ日はまだ男性社会などありません。女性が堂々と出かけられるのは仕事だけ。ならば仕事を持って、『私は稼いでいる』とご主人に言えればいいと思うんです」

そのために『できることがやれる場所』を提供したい」と話すゆきさん。「手先が器用ならば織物をするとか、ラッピングが得意とか、草いじりが好きならここに畑もあります」

母親が気軽に使える保育所を

今取り掛かっている活動の一つが、ミカンの皮で染め物や加工品を作ること。

coco-rinの敷地内に、大きな染色用の窯もすでに設置済みです。「一般社団法人ハウジングアンドコミュニティ財団からの助成金で工房を作り、母親に運営してもらおうと思っています。みんなが特性を生かして、やりたいことがやれる第一歩になればと思います」

もう一つ計画しているのが、企業主導型保育所の設立です。「三ヶ日の子育て環境における大きな問題は、子どもを預ける場所がないということ。母親の具合が悪い時などに一時預かりしてくれる場所がないんです。都会だったら1時間でも預かってくれる場所があり、母親たちは助かっています。coco-rinとして何ができるかと考えた末、企業主導型保育所を設立すればいいということにたどり着きました。商店街やまちづくり組織と連携して、森のようちえん“のような思想を持った保育所作りの実現を目指し、今動いています」



ミカン畑でスタッフと共に

2拠点で活動の場を広げる

coco-rinのスタッフは現在11人。その中には義母の眞利子さんもいます。「義母はサービス精神が旺盛です。海外の人たちの派遣の仕事をしていたためコミュニケーション能力も高い。coco-rinを始めるときは、絶対義母を誘おうと思っていました」

夫の健太さんも協力を惜しみません。「土日はうちの子だけでなく、スタッフの子どももよく見てくれます。イベントの手伝いなど、いろいろなことを面白がってやってくれますね」

家族以外のスタッフの多くは、ママ友や豊橋のオーガニックカフェのワークショップで知り合った人。「三ヶ日ママは、他県から嫁いできた人が多いです。直感で仲良くなれそうな人は分かるので、この人は、と思えば引き入れてしまいますね」

また、自分からもまちづくり組織に飛び込んで、活動の幅を広げている。「たまたま広島でもまちづくりの活動をやっているのですが、三ヶ日のためにもという気持ちで参加しています。一か所にどつぷりと入ってしまうと、見えなくなることもあるので、これからは体力が続く限り、三ヶ日と広島を歩き来してそれぞれの町のいいところを発見し続けていきたい。こちらの町のことをあちらの町に…というように、バランスよく互いの場所を生かしていけたらいいなと思っています」

タイムスケジュール

☆カフェ+宿泊あり coco-Rin day

6:00	息子を起こして朝食準備
7:30	お客様と違う部屋で朝ごはん
8:30	片づけ 母屋へ ワンコのごはんや家事(息子は保育園)
9:30	coco-Rinへ coco-Rinで接客や調理をしながらデザイン業 (パソコンはいつも持ち歩く)
15:00	昼ごはん・お客様チェックイン
16:00	カフェ片付け
17:00	夕ごはん準備
18:30	接客
20:30	夕ごはん 片付け
21:00	風呂
21:30	寝かしつけ
22:00	デザイン業が終わったら就寝

☆デザイン業だけの日(土・日・月曜日)

7:00	起床
7:30	朝食づくり
8:00	朝ごはん
8:30	片付け 息子の世話 ワンコのごはん
9:00	保育園へ送る
9:30	買い出しや会議
10:30	会議がないときは デザイン業や会計処理
13:00	昼ごはん 火曜はまかない食作り
14:00	デザイン業
15:00	洗濯など
16:00	保育園迎え
17:00	夕ごはん準備
18:30	夕ごはん
19:30	風呂
20:00	息子と遊ぶなど家族団らん
21:00	寝かしつけ
22:00	デザイン業

夫 久米健太さん



彼女とは大学時代に知り合いました。当時から様々なイベントを主催して精力的にこなしていました。新しいことを始めるときに、徹底的に勉強する姿には感心します。休日は子守をすることが多いですが、大変ではないですね。私も楽しんでます。

義母 久米眞利子さん



人と関わることが好きなので、充実した毎日です。今まで主婦として作ってきた家庭料理の経験が生かせてうれしい。スタッフやそのお子さんがいつも家にいる状態ですが、お嫁さんや孫がいっぱいいるようで楽しいですよ。

スタッフ 山本みかさん



豊橋のカフェでゆきさんと知り合い意気投合。今はスタッフとして働いています。今日は子ども3人を連れてcoco-Rinに来ました。他のスタッフの子どもたちとも遊べて、うれしそうです。企業主導型保育園「森のようちえん」実現のため、がんばりたいと思います。

あとがき

久米家の合言葉は「やれることを、やれる人が、やれるときにやる」。それぞれ別に取材したにも関わらず、ゆきさん、夫の健太さん、義母の眞利子さんが口を揃えて話す姿が印象的でした。

仕事も家事も育児も家族で一緒に担うことで補い合える…そしてその全てを大切にし、さらに仲間や地域の人と共に進化させる…。生き方、仕事の仕方が自分だけのものにとどまらず、雇用やまちづくりにも広がっているゆきさん。これらの活動が、地元三ヶ日町をさらに風通しの良い魅力的な町にしてくれるのではないかと期待します。
(渡邊圭子)

「減災お茶べりひろば」開催中!!

明保里美さんに聞く

2011(平成23)年の東日本大震災から10年。被災地から離れたこの静岡県で、どれだけの方が震災を風化させず、現在も防災や減災に取り組んでいるのでしょうか。地元で、子どもから大人まで、わかりやすく災害や減災について知る・考える場「減災お茶べりひろば」を主催して2年目の明保里美さん。地域への思いや、防災・減災への取り組みについて話を聞きました。

場の重要性

東日本大震災以降も、日本各地で地震や大雨、台風などによる様々な災害が発生しています。そのたびに被災地の被害の様子が報道されてきました。しかし、報道を見るだけでは被災地の現状は分からないものです。現地に行ったからこそわかることが多いのも事実です。

明保さんも災害ボランティアとして被災地に向き、様々なボランティア活動を行ってきた一人です。活動の中で、「場」の重要性を感じた出来事がありました。

広島県市は、「平成30年7月豪雨災害」で土砂災害に見舞われ、多くの被害があった地域です。報道こそされなくなりましたが、現在も仮設住宅での生活や、災害復旧作業が続いています。被災地の呉市で、明保さんは仮設住宅で行われる足湯のボランティアに携わりました。

「仮設住宅の中に、みんなが集まることのできる集会所のような場があって、そこで足湯をしました。集まれる場所があるから、足湯だけではなく、話をしたりお茶を飲んだりして来ていました。そこで、『場』というのがこんなに大事なんだ、ということを感じました。苦しい思いをみんなでも共有したり、思いをはき出せる場所があるだけで、こんなに仮設住宅の雰囲気が違うのだなあと。思いをポロっとはき出せるのはその場所の力なんだなあ、と思いました。そんな経験から、『場』は必要なものなんだ、と

いうことに気付かせてもらいました。地元でも『場』を作りたいと強く思うようになりました。防災に限らず、おしゃべりだけでもいい。お茶を飲みに来てくれるだけでもいい。月に1回しか開催できませんが、そんな『場』を作りたい、と始めました」

地元で開催「減災お茶べりひろば」

2020(令和2)年6月で2年目に入った「減災お茶べりひろば」。会場となる部屋には、防災グッズはもちろんのこと、カードゲームやすごろく、絵本なども用意してありました。目を引くのが、テント、段ボールベッド、トイレなど。実際に寝てみたり、実物に触ったり体験できるように準備してあります。購入したものは、値段が書いてあり、見に来た人が購入したいと思った時の参考になるように工夫されています。使い方やアイデアも明保さんから直接聞くことができます。

「粗品でもらったものや、安売りで買ったものもあります。非常持ち出しのリュックは、



子どもが中学の時に使っていたものなんだよ」と明保さん。

「防災用品」として売られているものではなく、日常生活の中で使っているもの、女性の視点を生かして集められたグッズは、「備え」に対してのハードルをぐっと下げています。

1年目は子どもだけでも来られるように、と交通の便の良い、遠鉄電車の駅のそばにある浜北地域活動研修センターで開催していました。2年目に入ってから地元でも開催したいと、住んでいる地域にあるコミュニティセンターも会場にして「ひろば」を開催しています。

地元開催の手応え

「住んでいる地域だと、近所の方が歩いて来ることがあります。コミュニティセンターで会合があった日は、帰りに若い世代から幅広い世代の方々が立ち寄ってくれました。災害時のトイレの問題は重要だと思っていて、簡易トイレの展示もしています。見に来た方が『あなたの話を聞いて携帯トイレ買いましたよ』と言ってくれることが、すごくうれいんです。私は災害の専門家ではありませんので、教えることはできません。減災や防災について考えるきっかけを作る役割だと思っています。災害時の生活に必要なものは『ひろば』にそろえてあります。展示を見て話すことで、備えのきっかけにしてもらいたいです」

あざれあ防災 カードゲーム

避難所での備えや
支援について考えよう

あざれあ交流会議が作成した防災カードゲームは、災害時の避難所生活において起こる可能性のある困難な状況や問題点などを認識し、地域の人々と共有しながら男女共同参画の視点を入れた対策を考えることを目的として作成されました。

「妊娠中の女性（20代）」「20年目の自治会長の男性（70代）」といった「なりきりカード」で設定された立場になります。そして、プライバシー、多様性、衛生、トイレ環境、安全、固定的性別役割分担などの問題点を提示されたら、なりきった立場での意見を出し合い集約していきます。

自分だったらこんな対応をするけれど、立場が違う人だったらどんな風に対応するのだろうか。なりきることで、違う視点での思わぬ発見があったり、立場に縛られて柔軟な考えができなかったりします。出てきた意見を「平時からやっておくこと」「災害が起きたときにやること」に振り分けて整理した後、あらかじめできる備え、問題解決のためにつなげておくことが必要な団体や組織、自主防災組織や自治会への要望をまとめていきます。

災害時の男女共同参画の視点を、地域の防災活動に生かしていきましょう。防災カードゲームの貸出については、原則として、あざれあ交流会議会員、あざれあ交流会議が主催する防災講座の修了者を対象にしていますが、詳しくはあざれあ交流会議にお問い合わせください。

問い合わせ先 あざれあ交流会議
TEL 054-250-8147（平日 9:00～18:00）



他地区の自治会長が防災や講座の相談に来たり、子どもたちが展示してあるエマージェンシーシート（災害や緊急時に使う極薄のブランケット）をマント代わりに遊んだり、「ひろば」での過ごし方は人それぞれでいいです。

女性消防団の活動

明保さんは地区の女性消防団員としての顔も持っています。活動を始めて4年、浜北区では6人の女性消防団員が応急救護の普及や啓発活動を行っています。最近のコロナ禍では、「コロナ感染が心配だから手を出さない、応急救護を積極的にしたくない」ということをなくそうと、「コロナ禍での心肺蘇生」のビデオ作成に取り組んでいます。

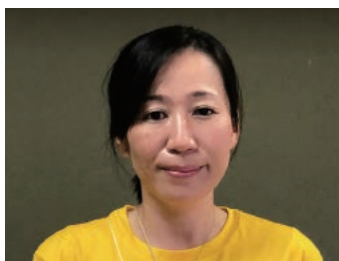
子ども向けにはパペットを使つての劇も考えています。生活と仕事を両立させながらの消防団員の活動は、女性の参加がまだまだ少ないのが現状です。

地域での活動

防災に携わる女性が、自身が住む地域で活動するのは難しい、と言われることがあります。

「自分が住む地域では、自主防災会の女性防災リーダーになっていきます。この地域に引越して来たら積極的に防災訓練に参加して、片付けなどの手伝いも自発的にしてきました。でも、なかなか自治会の活動に関わることができませんでした。ちょっとしたことを手伝うことから始めて、『手伝

て』と言ってもらえて、やっと地域内で防災の活動が始められました。楽しく参加できる防災講座を考えて、楽しい面からのアプローチをしています。いつも、誰か一人でも助けられるなら、何でもやろうと思っています。地域で誰も取り残さない、死なせない、というところを目指しています。災害時も住民同士がフォローし合い、みんなで助け合える地域になればいい、と活動を続けています」



【プロフィール】あけぼん さとみ 明保 里美さん

かんがえる Labo 主催
減災コーディネーター
地域密着型の活動にこだわり、自治会などの減災講座や中高生への減災授業など減災啓発活動を行う。被災地へのボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。

最後に

自分の命は自分で守るためにも、日頃の準備や対策は大切です。地域内で自発的に「ひろば」を開催し、減災・防災の取組をする明保さんの活動が、他の地域にも広がっていったらいい、と感じました。

住民を巻き込んだ防災・減災の取組は、どの地域でも必要はらずです。さらに、女性の視点を生かした防災への取組が、「地域防災の当たり前」になる時が一刻も早く訪れるのを願ってやみません。

（國井良子）

女性目線の防災活動を地域へ

「中田・馬淵女性防災ネット」

あざれあ交流会議主催「女性防災パワーアップ講座」への参加をきっかけに、2016（平成28）年4月から防災活動を始めた井上美恵さんと鈴木恵美子さん。翌年には町内の枠を超え、近隣3町内へと女性のつながりが広がり「中田・馬淵女性防災ネット」として活動が始まった。女性目線での防災への関わり方や役割を学びながら、地域住民の防災意識向上のために活動を続けている。地域の防災活動について、また、男性と一緒に女性が防災活動に取り組むためのヒントを聞いた。

グループ結成

井上 パワーアップ講座を受講した後に「中田二丁目女性防災グループ」を結成しました。講座の内容を地域の人にも聞いてもらいたいと、鈴木さんと二人で活動を始めました。

鈴木 私が二人で活動を始める時に思ったのは、多くの女性は、「防災は男性がやるものだよな。私たちは付いていけばいいよね。いわれたことをやればいいね。女性は炊き出しだよな」と思っているけれど、「そうじゃないよ」と。災害時には女性にも様々なリスクがあるということを勉強したので、女性に関わっていかないと、男性に女性の困りごととはわからないですよ、と。「女性も関わっていかないといけないんだよ」ということを皆さんがわかってくれて自覚してくれる。そうなるってほしいと思いました。



中田・馬淵女性防災ネットのみなさん

井上 全く同じです。以前に比べ、地域の女性の意識も少しずつ変わってきていると思います。でも、現実には地域で防災の活動をしている女性は少ないですよな。

活動の広がり

井上 「中田・馬淵女性防災ネット」はメンバーが13人です。みんなそれぞれ町内で活動していて、それが元になっています。お互いに手伝いに行ったりしながら、やってきました。おそろいの赤いユニホームを作ってから、「中田・馬淵女性防災ネット」の人たちが来ていると、地域の人に分かってもらえるようになりました。

鈴木 初めは1つの町内でした。それが、今は3つの町内に活動が広がっているわけです。災害時、同じ避難所に行く町内なんですよ。ですから、1つの町内だけで活動しているよりは3つの町内で活動している方が、いざと言う時、協力し合えるんじゃないかなあ、と。その時に初めて会って協力を始めるよりも、普段から防災活動でつながっていれば、女性



小学校保護者向け防災講座の様子

同士、協力しやすいと思います。

井上 女性の方が二歩先につながりを作ってきたことで、男性もお互いに知るようになってきたんじゃないかな。女性のそういうつながりはいいなあと思っています。

女性が町内で活動することについて

鈴木 駿援隊※に参加することで、防災にかかわらず受講生メンバーのつながりができました。

井上 その講座の卒業生で、連合町内会の防災の会合でプレゼンテーションをする機会があったおかげで、私はずいぶん意識が変わりました。

鈴木 プレゼンテーションをするにあたり二つの提案をしました。一つは避難所のトイレ。もう一つは防災の活動に女性を関わらせてもらいたいということです。

井上 駿援隊に関わるようになり、私たちも今のように活動が広がってきました。

町内でどれだけ認めてくれているかは分かりませんが、私たちから「今年もお願いします」と言わなくても、向こうから当たり前のように支援をしてくれます。そのお返しはしていかないといけない、町内の活動に協力をしていかないといけないと常々思っています。

※駿河区の人材育成事業 駿河区を応援する志をもつて地域活動に取り組む人々

町内会・地域の変化

鈴木 もともと町内の役員は男性が多くて女性が少なかったですよ。そこが、「防災は男性」というふうになっていたのかと。今は役員の中にも女性が入っていますし、女性の部署もできてきています。少しずつ変わってきていると思います。以前は7〜8人の役員が全員男性だったのが、今は11人の役員の内、5人が女性です。

井上 防災の活動が少しは貢献しているかなと思つてます。

鈴木 地区の防災委員会があつて、町内会長が集まつて会合を開くんです。全員男性です。そこに初めて、井上さんが会長の代わりに参加したんです。「なんだこの人は。なんでここに女がいるんだ」って目で見られたんだよね。

井上 町内では慣れていましたが、他の地域に出るとまだまだ厳しいな、と思つたんです。

その後、駿援隊の会合でトイレの発表をした時、その防災委員会の中心の方がそこにいて、顔がつかつて、私たちも参加させてもらえらるようになったんです。「一緒に会合に参加させてもらつて話を聞いて、去年はいろいろお手伝いをさせてもらいました。「女性も役に立つじゃん」って思つてもらわないと。女性の意見を聞かないといけないな、という雰囲気になってきていると思います。地道にやつて信頼関係をつくらないと。女性は何も言わないし何もやらないと思つていただけ、

やれるじゃん、と。力仕事はやれないけれど、やれることは何でもやる。

女性の視点

鈴木 連合町内会の防災訓練に参加して、女性の視点が入っていない内容に疑問をもちました。それを、意見として会議に出したんです。「防災訓練に参加してこう思いました」つて。男性が何十年も前に決めたのだと思うけど、仮設トイレはここに置く、あれはここに置く、つてレイアウトがあつたんです。それを実際私たちが見た時に、「こんな木が生い茂つて、北側の、建物の裏側の、ちよつと行かないかなという所にトイレ？ そこに行く通路も狭くて灯りもなく、足場もよくない。そんなところに仮設トイレを作る予定だったんだ」と初めて知つたんです。男性は気がつかなかったのでしょうか。トイレはなるべく端っこに。臭いもしなくて迷惑にならないところがいいんじゃないかって、そう思つていた。だからそこにしたと思ふんです。でも、いろんな勉強をしてきて、人がいないところは危険だ、細い道も危険、つてことが分かる、ほんとにここで良いのかしら？つて。男女一緒になつていけるけれど、分けられないのかね。**井上** レイアウトが決まっているのに、「それではだめ」つてその日に言つてもね。普段からまず自分の町内や地域から活動を始めて、何かにつけ顔を出しながらやるのが大事なんだなと。なんだかんだ言つても「つながら」だと思ひます。

防災訓練の提案

鈴木 私が今の町内に来て30年くらいになるのですが、防災訓練は、三角巾の使い方、消火器の使い方、毛布の担架、バケツリレー、そういうのをずっとやつていたんです。三角巾つて、各家にあるわけじゃないし、怪我をしている人がいる。じゃあ、三角巾持つてこなきや、つていうのは違うでしょ。最近の訓練は、大声を出す、とかね。「助けてー」とか、「こつちに埋もれている人がいるから来てー」とか。大声つて必要だと思うんです。だから、防災訓練に大声コンテスト！

井上 区役所に協力してもらつて、何デシベルか測れる測定器を用意してもらつて。「助けてー」と。楽しくね。女性部門、男性部門、シニア部門、小学生部門、つて。他にはトイレの組み立てをやりました。



馬淵防災訓練にて仮設トイレ体験

鈴木 トイレは、避難所に設置される仮設トイレ。私たちの町内が、仮設トイレの設置の係なんです。役員だけがトイレの設置ができるのではなくて、みんなもできなくっちゃ。それで、「みなさん、こんなトイレみたことありますか？ 組み立ててみましょう」と。**井上** 同じ避難訓練でも最近は内容が変わつてきました。女性の意見が取り入れられて、私たちがやらせてもらっている。子連れの親子だとか小学生とかも参加が少しずつ増えていきます。女性がやることは地道ですよ。地道にやつてきた結果だと思つています。

最後に

地域の防災への取組を加速させるのは、女性の力が大きいと実感した。女性の視点を防災に取り入れることで、活気のある活動に発展しているのが今回の話を聞いて分かった。男女それぞれが歩み寄り、地道に信頼関係を作ることで、地域内における男女共同参加が実現するのなら、他の地域も積極的にこのような取組を進めるべきだ。町内活動は男性に任せておけばよい、という多くの女性が持つている考えを改めることで、女性の活躍の幅は広がり、それは地域の防災力向上にもつながっていくだろう。

(國井良子)